

『石鉄』第五十号刊行に寄せて

『石鉄』はこの度、第五十号の刊行を迎えた。いまは「人間五十年」などとは言わないまでも、「半世紀」にわたって継続してきたことは重く受け止めたい。この間、昭和は平成となり、二十世紀は二十一世紀となった。本学は松山商科大学短期大学部商科第二部として創設され、松山短期大学へと変わった。

鴨長明が「方丈記」の書き出しに「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」と著しているように、時の流れに従い、大きなうねりとなって変化する社会の流れを止めることはできない。そして、あたかも表面上は変わりがないように見えても、中身は大きく異なっている。

とはいうものの、『石鉄』は、本学において、書物の名前として脈々と受け継がれてきた「変わらない」ものである。そもそも『石鉄』は「いしづち」の音を持ち、旧字体で書かれた『石鐵山』は霊峰石鎚山の別表記である。西日本一の標高を誇り、古来より修験道の聖地として君臨し、現在でも広く信者を集めている火山である。千数百万年前までは噴煙を上げ溶岩を溢れさせていたという。いまは噴火こそしないものの、急峻な岩場が人を寄せ付けなような厳しさをもって、或いは、四季折々の美しい自然の姿を見せてくれる景勝地として、四国山地の中心にそびえている。そして、その姿は変わらないものの象徴として何百万年もそこにあり、これからもあるのだろう。

松山短期大学という器もまた川のようなものである。年々入学する学生、卒業する学生、教職員もまた川の流れのように、ひとつとどころにとどまるわけではなく、この五十年の間に入れ代わり立ち代わり変わってきた。『石鉄』はその変わり様を、まさに石鎚山のように、自らは変わらずに映してきたのだ。

二十世紀の後半の五十年は、日本にとっては復興から繁栄の時代であった。「人口ボーナス」と呼ばれる人口増加に伴う成長の配当を享受し、産業の第三の波にも上手く乗って先進国の中のトップランナーを自負するような時期であった。しかしながら、二十一世紀は人口ボーナスの負の配当、すなわち超高齢社会を迎え、少子化社会、縮小均衡社会に向かっている。大きな変革を遂げなければならない時代であり、しかも、地球規模の課題に直面せざるを得ない時代である。

これからの五十年は、変わらないもの、変えてはいけないものは何かを見極め、変わらなければいけないものは勇気をもって変えていくことが求められる時代であろう。『石鉄』には変わらずに、これからの五十年も、時代を映す鏡となって行って欲しいものだ。

学長 上杉志朗